

種 文
学 賞

令 和 作 四 年
第 一 品 集 回 目

下



令和四年最初の種文学賞は、次のお題で作品を募集しました。

小学二〜三年生の部 「すごい！」

小学四〜六年生の部 「はじまりの神話」

中学生の部 「はじまりの神話」／「地の文をつくろう2」

高校生の部 「『信』のつく熟語」／「現代語訳大賞」

この下巻では、中学生の部と高校生の部の全作品を紹介します。どれもすばらしい文章ですので、ぜひお楽しみください！

※ 筆者・作者名はペンネームで記してあります。学年は令和四年三月時点のものを記してあります。紹介の順番はペンネームのあいいうえお順になっています。

【中学生の部① 「はじまりの神話」】

☆ 中学生には、二つの課題からどちらかを選んで取り組んでもらいました。まず「はじまりの神話」は、ものごとの起源（はじまり）の神話を創作するという課題です。日本をはじめさまざまな国で伝えられている起源神話にふれながら、それぞれが自分だけの神話をつくりました。二つの作品が提出され、どちらも甲乙つけがたかったですが、今回は「かたてさなさたか」氏の「宇宙のはじまり」が最優秀作品にかがやきました。

作者 かくしき
かたてさなさたか (中一)

宇宙のはじまり



遠い昔、ある神様の子どもが、一九七五二一〇才の誕生日をむかえようとしていました。その家の習慣には、一万年に一度、子どもが誕生日をおかえた時に花火を打ち上げるといふものがありました。そこで、両神（親）は、子どもが喜びそうな花火を作る計画を立てました。

二人はまず、自ら光り輝く粒と、その周りにくるくる回る光を反射する素材でできた粒をつくりました。自ら光る粒の光を反射して、その周りの粒をミラーボールのようにするためです。しかし、これらがまんべんなくちりばめてあるだけでは、初めの方では楽しんでいても後になってただの明かりになってしまうと両神は考えたので、先ほどのまとまりをたくさん集めた円盤を作り出し、これらが蜂の巣状になるようにしました。

ここまでを作りおえてから、まだ千年ほど時間によゆうがあるので、爆発させた後のことについて話し合いました。まず、二人はその花火がちょうど良いサイズで広がるのをとめるために、球体の中に花火を閉じ込め、球の外に粒が飛びちらないようにしました。また、お母さんの思いつきで一つだけ生きものの住む自然豊かな粒を加えました。

こうして、試作品一号が完成し、両神はものすごくいなかの誰もいないところでその花火を打ち上げてみました。出来は、最初の方は両神の思い描

いた通りだったので、途中で、粒が変色したり、新しいものができたり、逆に消えてしまったりして目茶苦茶になってしまいました。そこで、両神は、粒が増えすぎないように、古くなった粒をすいこんで掃除機のような役割をはたしてくれる円盤をいくつか加えた花火を作りました。

このように試行錯誤を繰り返すこと十六回、ついに理想の花火が完成しました。

そして迎えた誕生日当日、予定通り息子の誕生日を祝い、ごちそうを食べた後、両神は工夫に工夫を重ねた花火を打ち上げました。まず、真っ暗なところに光の筋が上にのぼって行き、まぶしい光と共に大爆発しました。そして、数々の光り輝く円盤が飛び出してきて、何も無い空間に広がりました。子どもも喜んで、誕生日は大成功しました。

ここから数十億年たち、お母さんが作った生き物の住む粒の住民は、自分たちの粒を地球、この花火の跡全体を宇宙と呼び、毎年夏に小さい花火を打ち上げて、その誕生を祝っています。

作者 TOMO (中三)

睡眠のはじまり

昔、地球という星では、ずっと太陽が出ていて、木の成長がすさまじかったせいで、ほとんどの土地が森でした。しかしその中でも唯一草原が広がる大地があり、そこには人間という生き物が住んでいました。人間はネムという神様が作った動物の一つで、昼も夜も踊ったり、歌ったり、日々遊び続けるやかましい存在でした。一方、ネムは読書が大好きな、頭の良くなるんびりとした性格の持ち主でした。しかし、そんな神にも悩みがありました。それは、人間が一日騒がしくて、読書に集中できないことでした。

ある日、ネムはどうすれば人間が静かに過ごす時間を作れるかを考えました。

まずネムは、世界から音を消すことにしました。すると地球は静かになり、神は喜んで読書を始めました。しかし、二日後、やはり気になって大地へ様子を見に行きました。すると前とは全く様子が変わり、大地の人口は以前の3分の2まで減少していました。ネムは気がつきませんでした。音が無くなる、意思疎通ができず、人間は死んでしまうのだと。ネムはこれではまずいと思い、世界に音を戻しました。

そしてネムは再び考えました。どうすれば人間を減らさずに静かにすることができるのかを。そこでネムは世界に夜をつくることにしました。大地を暗くすることによって、人間が静かになると考えたからです。しかし、人間は暗くなると木を燃やして明るくし、どんちゃん騒ぎをくり返しました。神は、これでは意味がないと嘆き、また思考をめぐらせました。

そしてネムは、「人間を働かせ、土地を開拓させれば良いのではないか」ということを思いつきました。

次の日ネムは大地に降り立ち人間を集めて言いました。

「生活できる新しい土地が欲しくはないか？この先に平坦な土地が広がっているぞ。明るいうちに木を切つてしまえ。」

人間は「自分たちの住む場所が増える」と喜び、土地を開拓するようになりました。そして、日が沈むと疲れ果てて、動かなくなってしまう。けれど、日が昇るとまた人間は動きだし、働きました。このようにして、人間たちは日が昇っている時に働き日が沈むと動かなくなりました。そして、このように人が日が沈んでいる時うごかなくなることを神の名を取り「ねむる」と呼ぶようになりました。

【中学生の部② 「地の文をつくろう2」】

☆ 次のお題は、「地の文をつくろう2」です。二人の人物の会話を読んで、①その場面までのあらすじを百字以内で作る、②地の文を書き加えて場面を完成させる、③地の文を作るうえで工夫した点を三百〜四百字で述べるといふ三つの課題にとりくむといふ内容です。地の文をつくるさいには、「すべての会話文の前後に地の文を必ず加えなければならない」、「地の文の最低一か所に、事物や風景に関することを入れなければならない」といふ二つの条件が設けられています。

まずは、その会話文を読んだ上で、それぞれの作品をご覧ください。作者それぞれが工夫したことを述べた文章ものせませむので、そちらもぜひ注目してみてください。

「はあ？ あんた、自分が何言ってるか、わかってんの？」

「いや、ほんとなんだって！ 信じてくれよ！」

「ちょっと！」

「ばかも休み休み言ってくれ。そんなことがあるはず……」

「えっ……」

作者 N (中二)

最優秀作品

(これまでのあらすじ)

努と友達だった陽菜は急に姿を消してしまった。彼女の父親である一さんはそれ以来別人のように変わってしまった。それから一五年後、努はこの頃疲れている一さんをハイキングに連れ出した。(八十七字)

休憩所の自動販売機に飲み物を買に行った一さんを待っていると、努はどこかで見たことある女の人を見つけた。彼はどうしても彼女のことを思い出せなかった。彼は中学、高校の同級生、小学校の同級生を可能性として考えたが少しも思いつかなかった。けれども、奇妙なことに、彼が昔、手作りしたのと同じキーホルダーを彼女がリュックサックに身につけていることに気がついた。彼はそれを見た瞬間彼女のことを思い出した。彼女は陽菜なのだ。彼はすぐに一さんのところに行き陽菜がいると伝えた。

すると一さんは、

「はぁ？あんた自分が何を言ってるか、わかってんの？」

悲しそうな目を彼に向け少し笑いながら答えた。

「いや、ほんとなんだってー信じてくれよー」

それでも、彼は諦めず一さんにしつこく言った。

彼が言っていることを信じられない一さんは彼から離れるようにハイキングコースの階段を上り始めた。

「ちょっと！」

と彼はすかさず一さんを追いかけた。

「ばかも休み休み言ってくれ。そんなことがあるはず……」

階段を上りきると同時に一さんの体が硬直した。雲に覆われていた空から一本の真っ直ぐな日の光が二人の先にある坂の上を照らしている。その光の中に女の人立っていた。

「えっ……」

一さんの視界にはその女の人しか入っていなかった。

【工夫した点】

私がこの地の文において工夫したところは三つあります。一つ目は読者に伝わりやすくさせるための工夫です。読者が分かりやすいように登場人物を少なくしたり、関係性をわかりやすくしたりすることを心掛けました。二つ目は地の文の雰囲気を出すための工夫です。私は物語を感動的かつ神秘的に書きたかったので、一さんが見たかったものを一さんの会いたかった人と連想し、ハイキングという自然に包まれた場所を舞台として設定しました。また、光の中に女の人がいることでスポットライトのように目立たせ、雲からわざわざ女の人に一本の光が照っていると表現し少し奇妙な感じも加え、女の人を坂の上にいさせることで彼らは彼女しか見ていないということを想像しやすいよう工夫しました。三つ目は心情を伝える工夫です。前半は努、後半は一さんのように二人に焦点を当てて心情がわかるようにしました。このように、主に3つの工夫を地の文に入れました。(三九五字)

作者 今年も冬眠中(中三)

(これまでのあらすじ)

慎太郎と涼太と朱音は、中学校にずっと伝わってきた七不思議の内の一つ「曇りの日に旧校舎の体育館裏に一人で
行くと消える」ということを三人で確かめようとしていた。朱音だけ後から合流することになっていた。(九十八
字)

さっきまで聞こえていた涼太の声が急に消えた。数秒前まで体育館裏で楽しそうだった涼太が今まで聞いたことのない鋭い悲鳴をあげ、パタリと何も言わなくなった。一瞬で背筋が凍りついた。本当に七不思議がおこってしまったのかもしれないと怖くなり、慎太郎は動けなくなった。もし今涼太がそこにいるかを一人で確かめると自分も同じ目に遭ってしまうかもしれない。ホラー映画が得意な慎太郎でもさすがに無理だった。必死に自分を落ち着かせようとしていると、階段をあがってくる足音がした。朱音が来たのだ。少し安心した。今日の前で起こったことをすべて朱音に説明した。すると、朱音は

「はぁ？あんた自分が何を言ってるか、わかってんの？」

といらだちをあらわにして言ってきた。朱音は気が強くまた物事を論理的に考える人だから、七不思議が起こったなんて言われてもありえるわけがないと思っっているのだろう。

「いや、ほんとなんだって！信じてくれよ！」

あまりの恐怖に慎太郎は声を荒げてしまった。恐怖で腰が抜けている慎太郎に対し朱音は平気な顔をしている。どれだけ気の強い女なんだと慎太郎が思っていたら、朱音は歩きだした。朱音は自分の目で見て確かめようとしているのだ。

「ちよっと！」

朱音を引き留めようとしたが、聞く耳も持たない。朱音も消えていくのは怖すぎるし、一人残るのも怖すぎる。さっきから何も喋らず黙々と歩いていく朱音に慎太郎は怖くなって、何かにとりつかれたかと不安になっていた。

すると、突然腕時計の音が鳴った。最近触っていなかったはずなのに。

ふと顔を上げると、朱音が角で止まっていた。恐怖と強がりの入り混じった表情で朱音は慎太郎の方に振り返った。

「ばかも休み休み言ってくれ。そんなことがあるはず……」

朱音は体育館裏へ目をやった。

「えっ……」

そこには上ばきが転がっていた。涼太の名前が書かれていた。信じられない。七不思議が本当に起こってしまっなんて。言葉を失って硬直している朱音を見た慎太郎は全てを察した。

【工夫した点】

私は初めて今回の課題の会話を讀んだ時に最後の場面で登場人物が恐怖を味わっているように感じ、そのイメージで作品を完成させました。今回、いかに読者が登場人物と同じ体験をできるかを重視して作りしました。その工夫として最も大きなことは多くの人が経験したであろう学校の七不思議を試していくという場面をモチーフにしたことです。こうすることで、自分もしたことがあると親近感をもってもらえると考えました。他に、説明的になりすぎないように、第三者目線だけではなく登場人物目線で心情を語るなどして地の文を完成させました。今回の課題の内の一つの情景描写や事物の描写の挿入では、結末に導くために、何か不吉なことが起こりそうである日常でもあり得そうな腕時計がいきなり鳴るということを取り入れました。これらのことを工夫して作品をつくりました。(三五五字)

作者 NiX490 (中一)

(これまでのあらすじ)

行方不明者が続出している上雲町に住んでいる坂木はサッカー部に所属している。八月十四日の夜、坂木は毎日のようにある部活に疲れ、帰宅していた。その途中、家の前の薄暗く人気がない路地で幽霊をみてしまった。(九十九字)

八月十五日の夕方、サッカー部の友人の水本と雑談をしながらゆっくりと歩く。そろそろ水本の家の方向と分かれるY字路につくとき、世間話や噂話に花が咲いていた。世間話になると必然的にニュースにもなった行方不明者が続出している例の事件が話題に上る。ニュースでも言っていた通り、警察は犯人を追っているが、坂木が住んでいる町の人々には幽霊の仕業だという噂が一番有力だ。坂木は昨日幽霊と認めたくない影を見てしまったので早めに他の話題に変えたかった。しかし、水本が青い顔をして幽霊を見たと言った。

「はあ？あんた自分が何を言ってるか、わかってんの？」

坂木が若干顔を引きつらせながら否定する。口調が少しおかしくなってしまったが、それはしかたがない。肯定してしまえば自分は幽霊を見たと思えることになると思ったからだ。

「いや、ほんとなんだってー信じてくれよ！」

水本はこれから自分がどうなるのかが恐ろしいのだろう。必死な顔で坂木のうでをつかむ水本から逃げるようにY字路の左の道に走りこむ。

「ちょっと！」

水本の家はY字路の右側の道だ。坂木に走って逃げられると追いつけないことは水本も知っていたのでその場に立ちすくみ、しばらくしてトポトポと右の道へ入っていった。

「ばかも休み休み言ってくれ。そんなことがあるはず……」

家がある暗い路地を歩きながら坂木は呟く。いつの間にか日も落ち、昨日と同じようにたよりない街灯の下を歩いていると、ふと坂木の頭のあたりにじめっとした生温かいような冷たいような風が通った気がした。……風なのか？少し足を止め、自分の背後をふり返る。気のせいではなく、体でも違和感を覚えたのか、半袖から出ているうでに鳥肌がたっている。ほんのりと頭上の空が明るくなっている気がして、無意識に見上げる。

「えっ……」

空には、昨日みたあの幽霊のような人型をつくっていた青白い粒子が無数に光っていた。

【工夫した点】

私は今回の作文を「オリジナリティを出す」をテーマにして書きました。オリジナリティを出すために書いたポイントの一つ目は幽霊を出すということです。この種文学賞で幽霊を使って物語を書いた人は少ないのではと思いい、書きました。けれど、どこかで読んだことがあるような、よくある展開になり、あまり面白味のない物語になってしまいました。二つ目は主人公と友人の名前です。主人公は神に関係のある名前にしたかったので、神棚のお祀りに欠かすことができない神を「坂木」に変えて苗字にしました。友人の名前は「霊は水周りによくいる」といわれるので水本にしました。三つ目は日づけです。なぜ八月十五日にしたのかというと、八月十三日から十五日はお盆の期間だからです。行方不明が続出しているのは異界から帰ってきた霊に道づれにされたから、というような話にしたかったです。（三六五字）

作者 ゆなつく(中一)

(これまでのあらすじ)

ある日、中学一年生で幼馴染のソラとダイゴは、雑談を交えながら教室で夏課題の計画を立てていた。すると、唐突にソラが去年の夏、塾の帰りに人気の少ない場所で、恐ろしい宇宙人に話しかけられたと言い出した。(九十八字)

あまりに急な発言に、ダイゴは驚いた。それも、いつも真面目なソラが言ったものだから、余計に信憑性があった。窓から見える雲がゆらゆらと揺れていた。

「はあ？あんた自分が何を言ってるか、わかってんの？」

教室で喋るにはあまりにも大きな声で言ってしまったため、数名のクラスメイトがダイゴ達の方を振り向いた。

「いや、ほんとなんだって！信じてくれよ！」

ソラがそう叫びながら勢いよく立った衝撃でカーテンが揺れた。ダイゴは今までに見たことのないソラの様子に、少し違和感を覚えた。だが、ストレスでも溜まっているのだろうと思い、呆れた表情で溜息を吐いて、教室移動を始めた。クラスメイト全員が移動し始めたため、机が触れあってガタガタと音が響いた。

ソラはダイゴを引き留めようとしたが、すでに教室を出ていた。少し怒らせてしまったのかな、と思いながらソラは後を追った。

理科室へ着くと、ダイゴが笑顔で手招きをしていた。ソラはそれを見て安心し、軽く手を挙げながらダイゴの隣に座った。

授業が終わり、帰る時間になった。二人はいつも通り喋りながら帰っていた。気付くと、ソラが宇宙人に話しかけられた、と言っていた場所に通リかかった。毎日通っているはずの道なのに、周りに人気はなく、いつも以上に静かだった。なぜかダイゴは今まで宇宙人を信じていなかったものの、

ソラの発言で、本当に存在しないのかと疑念を抱きつつあった。しかし、こんなことを考えていても仕方がないと思い、少し首を振って気持ちを切り替えようとしたその瞬間、ソラはダイゴの袖を強く引っ張り、上を見上げ、震え始めた。一体ソラが何で震えているのか、何が見えているのか、ダイゴには全く分からなかった。ピリピリとした雰囲気があった。

「ちょっと！」

とソラが口を開いた。そして、何かを指さすような仕草をした。ダイゴは自分に見えていないものがソラには見えている、ということが腹立たしくなってきた。そして、そのイライラをぶつけるかのように、

「ばかも休み休み言ってくれ。そんなことがあるはず……」

と若干唇を震わせながら叫んだ。突如として、二人は強い衝撃を感じた。身体が吹っ飛んでいくような感覚に思わず目を瞑った。しばらくして目を開けると、5 mほど先のアスファルトが剥がれていて、その上に異形な何かがあることに気付いた。ソラの異常なまでの反応から、ダイゴはそれがソラが去年話したと言った宇宙人であることを悟った。それと同時に、今まで感じたことのない恐怖と、直ちに去らなくてはという気持ちに駆られた。そしてソラの方を見ると、ソラは消えていた。ダイゴは凍りついた。変な化け物が現れたかと思えば自分の親友が消えたのだ。焦りながらも辺りを見回してソラを探したが、やはりどこにも見つからなかった。次の瞬間、化け物が高く飛び上がった。そして、気付くと忽然と姿を消していた。あまりに突然の出来事に、ダイゴは身体を震わせながら、

「えっ……」

とつぶやいた。そしてあまりにも異様で誰にも信じてもらえないであろう光景を目にし、呆然とその場で立ち竦んでいた。

【工夫した点】

全体としては、とにかく物語自体が読んでいてつまらない、と思われないようより奇抜な展開になるよう心がけました。さらに、会話文の手前の地の文に入れている情景描写等で細かいところを見ることにより、より臨場感を出せるように工夫しました。前半の教室のシチュエーションでは、ダイゴがあまり怒っているわけではなく、どちらかと言えば驚き呆れているということと、ソラが本当に宇宙人とのことを伝えただがっている、ということ強調できるように、登場人物の行動描写を工夫しました。後半の帰り道のシチュエーションでは、本当にダイゴが自分の置かれている状況を理解できておらず、ほとんど思考停止している状態である、ということを手く表現できるように、感情表現を増やしました。そして、宇宙人を化け物、と文中で書き換えることで、より一層ダイゴが恐怖心を抱いていることを強調しました。(三七三
字)

【高校生の部 「現代語訳大賞」】

☆ 高校生の部も二つのお題から自由に選んでもらうことにしましたが、今回作品提出してくれた高校生は一人で、その生徒が選んだのは「現代語訳大賞」の方でした。

このお題は、平安時代末期に生まれた説話集『今昔物語集』の中に収められている「聊に地藏菩薩を敬ひて活へるを得たる人の語」という題の文章を現代の言葉に翻訳するというお題です。昔の言葉を機械的に現代の言葉に置き換えるだけではなく、自然な現代語に置き換えることを目指すという課題です。

原文と照らし合わせながら、生徒の工夫のあとを味わっていただければと思います。

※提出者が一名なので、この部の最優秀作品の選出はありません。

「聊に地藏菩薩を敬ひて活へるを得たる人の語」

訳者 ハル（高一）

今となつては昔のことだが、源義仲の朝臣という人がいた。強くて勇ましく、武芸の道に優れていた。そのため、武芸については公私ともに微用された。ところで、源義仲の朝臣のもとに、一人の家来の男がいた。彼もまた勇ましく、殺生を行うことを生業としていた。少しも善い行いをすることがなかった。ある日、彼が広い野に出て鹿を狩っている時に一頭の鹿が出てきた。これを射ようとするが、鹿は走り逃げてしまった。郎等は鹿が逃げた方向に従って馬を走らせて追っていると、道中に寺があった。寺の前を通りすぎる際に横目で中を見ると、地藏菩薩が立っていらっしやうた。これを見て郎等はほんのわずかに敬う心を起こし、左手で笠を脱いで走り過ぎた。

その後、しばらく経たないうちにその郎等は病にかかり、数日苦しんで死んでしまった。すぐに冥土へ行き、閻魔王の御前にでることになった。郎等が庭を見渡すと、多くの罪人たちがいた。そこでは、罪の重さを定めて罰を行っていた。郎等はこれを見て、目の前が真っ暗になって悲しみは計り知れない程だった。彼が「自分は一生の間、罪業のみ作り、善い行いは行わなかった。そのため、罪から逃れる方法はない。悲しいありさまだ」と思っているところに、小僧が現れた。小僧はとてもきれいで威厳があった。その小僧は郎等に向かって、「私は貴方を助けようと思う。すみやかに現世へ戻って、長年つくってきた罪を懺悔しなさい」と言った。男はそれを聞いて喜び、小僧へ問いかけた。「何故私を助けようとしてくれるのか」と。小僧は、「私を知らないのか。私は汝が鹿を追って馬を馳せ寺の前を通り過ぎた際に、寺の中でちらと見た地藏菩薩である。長年つくってきた罪はとても重い、一瞬は私を敬う心があり笠を脱いだことに免じて、今汝を助けるのだ」と答えた。男が何か言おうと思った時には、すでに彼は生き返っていた。

その後、男はこれを妻子に語り、泣き悲しんだ。それ以来男はたちまちに道心を起こし、殺生を絶ち、ひたすら地藏菩薩を日夜に念じ、それを怠ることはなかった。

このように、地藏菩薩はほんの少しの間でも敬いの心を起こす人をすら見捨てることはない。ましてや、心を起こして長年念じ、また、仏像を作り絵に描くような人を救いくださることは疑いようもない。そうであるので、地藏菩薩の誓願は他のものに勝り、頼もしく思えるのだ。

人はこれを聞き、ひたすら地藏菩薩に仕えるべきであると語り伝えられることとなった。

〈課題・原文〉

今昔、源の満仲の朝臣と云ふ人有けり。心猛くして武芸の道に堪たり。然れば、其の道に付、公・私に被用たる事無並し。而るに、

※ 堪たり…優れていた

※ 公・私に被用たる事無並し…公私ともに重用された

其の人の許もとに一人のらうどう郎等の男有り。亦また、心猛せつしようくして殺生を以て業とす。更さらに聊いさかにも善根ぜんこんを造る事無し。而る間、広き野に出でて、鹿を狩る時に、一の鹿出来たり。此を射むと為るに、鹿走り逃ぐ。此の郎等、鹿の逃るに随したがひて馬を馳せて追ふ程に、一の寺の有ける前を馳せ渡ける時に、眸まなじりにみ寺の内見遣りたるに、地藏菩薩立給へり。此を見て、聊に敬おこふ心を發して、左の手を以て笠を脱ぬぎて、馳せ過ぎぬ。

其の後、幾いくばくの程を不經へず※して、此の郎等の身に病を受て、日来悩み煩て、遂に死ぬ。忽たちまちに冥途めいどに行て琰魔王の御前いたりに至ぬ。郎等其の庭を見廻めぐらせば、多の罪人有り。罪の軽重を定めて罰ばちを行ふ。郎等此を見るに、目暗めくれ※心迷まどひて悲かなしき事無限かぎりなし。而るに、此の男の思はく、「我れ一生の間、罪業をのみ造て、善根をば不修しゆせざりき※。然れば、罪敢て可あへ適のがるへき方無からむ。悲わざしき態なげかな」と思なげひ歎なげき居たる程に、忽いに小僧出来り。其の形ち端嚴たんごん也。此の男に語て云く、「我れ汝を助けむと思ふ。速すみやかに本國もとのくにに返りて年来造れる所の罪を懺悔ざんげせよ」と。男これ此を聞きて喜び、小僧に申て云く、「此れ、誰人の我れを助け給はむと為するぞ」と。小僧答て宣く、「我れをば不知しらずや。我れは汝が鹿を

※ 郎等…家来

※ 善根…よい行い

※ 眸に…横目で

※ 不經ず…打消しの助動詞「ず」があるので、この「不」の字は必要ないが、表記上残っている。これは『今昔物語集』が漢文訓読体の文章であることに起因する。他

の箇所「無限し」を「かぎりなし」と読ませることもこれに通じる。

※ 目暗れ…目の前が真暗になつて

※ 不修ざりき…行わなかつた

※ 悲しき態…悲しいありさま

※ 端嚴…きちんと整つていて威厳がある

追おひて馬はせを馳まて寺まの前へを渡わりし時にに、寺まの内にに急きと※見みし所の地蔵菩薩なり也なり。汝なんち年とし来ころ造つる所の罪つみ、甚はなだ重いしと云いへども、須臾しゆゆ※の間聊に我

れを敬ありふ心あり有ぬて笠ぬを脱ぎたりしに依よりて、我われ今いま汝なんを助たすけむと宣のたまひて、返かへ遣らすと思おもふ程にに、活よめぬ。

其その後のち、男おとこ傍かたはらなる妻かたり子こに語かたりて、泣なき悲かなしむ事こと無な限りし。其そのより、此この男おとこ忽たちに道みち心こころを發おこして、永とこく殺ころ生なを断ひて、偏ひとへに地蔵菩薩を日ひ夜よに念ねん

じ奉たてまりて、怠おこる事こと無なし。

此これを思おもふに、地蔵菩薩は、白あか地らに敬うひの心こころを發あせる人ひとそら※不す棄て給たまはざる事こと既すで如かく此ことし。何いかに況いはんや、心こころを發あして年とし来ころ念ねんじ奉たまり、亦また、形ぎやう像ざうを造つくり画ゑがきたらむ人ひと※をば救すくひ助たすけ給たまはむ事こと可たが疑がきに非あらず。然しかれば、地蔵菩薩の誓せい願がん※他たに勝すぐれ給たまへて、憑たのもしくなむ思おもゆる。

人ひと此これを聞きて、専もに地蔵菩薩に可たが仕ましとなむ語かたり伝たへたとや。

- ※ 急と…ちらと
- ※ 須臾…一瞬
- ※ そら…すら
- ※ 形像を造り画たらむ人…：仏像を作り絵に描いた人
- ※ 誓願…仏・菩薩が人々の救済を願って必ず成しとげようと定めた誓い。